

【暗証聖句】

ヨハネ 3 章 14、15 節 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

【日・天地創造の前から】

使徒言行録 2 章 23 節に「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのです…」と書かれてあり、十字架の贖いは神のご計画であったことがわかります。では、いつこのご計画は立てられたのでしょうか。黙示録 13 章 8 節を見ると、「地上に住む者で、天地創造の時から、屠られた小羊…」と書かれてあります。天地がまだ創造の時からイエス様は屠られた小羊として描かれています。つまり、十字架の贖いの計画は天地創造の時にはすでにあつたということです。各時代の希望上 P5 には、「我々を贖う計画はあとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった…初めから、神とキリストは、サタン、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞的な力によって人類が墮落することを知っておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に必ず備えをされたのであつた」と書かれてあります。これは実に驚くべきことです。イエス様は天地を創造する前に、もし人間が罪を犯すことのみならず、悪魔が天で背信することを予見され、そのときご自分が命をもって人類を贖い、救う計画を立てておられたということです。「福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画」(ローマ 16:25)とパウロが言うように、これは私たちの理解を超えた善と悪との宇宙規模の大争闘にも関わる壮大なご計画だったのでした。私たちは神様のご計画をすべて理解できないかもしれませんが、はっきりしていることがあります。それは神様は私たちを愛しておられるということ、そして、その愛のゆえに、「永遠の命の希望を…永遠の昔に…約束してください」(テトス 1 章 2 節)つたということです。

【月・十字架への序章】

イエス様はご自分が十字架にかかって死ぬことを、少しずつ弟子たちに語って聞かせます。

マタイ 16 章 21 節「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」

ところが、それを聞いたペテロがあろうことかペトロがイエス様をわきへ連れだして、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」といさめるのです。すると、イエス様から、「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」(マタイ 16:23)と、こっぴどく叱られてしまうのですが、しかし、それくらいで死たちにとって愛するイエス様が殺されてしまうことは信じられないこと、受け入れられないことだったのでした。後日、再びイエス様をご自分の死と復活を予告されると、「弟子たちは非常に悲しんだ」(マタイ 17:23)と書かれてあります。イエス様にもはや反論するものはいません。イエス様が殺されるかと思うと、ただ悲しかったのです。「殺されても、復活する」と語っておられるのですが、そこまで思いはいかなかったのでしょうか。そのことに関しては、ルカ 18:34 で、「彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する」(ルカ 18:33)とイエス様が語られたあと、「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである」(ルカ 18 章 34 節)と書かれてあることがヒントになるかもしれません。イエス様が死なれるということは、弟子たちにとって受け入れがたい、信じたくないことであり、また悲しいことでありましたが、そもそもなぜ、イエス様が殺されなければならないのか分からなかったのです。自分たちの理解を超えた悲しい出来事が起ころうとしている。復活の希望まで、この時点では頭が付いて行かなかったのでしょう。

【火・すべてが終わった】

イエス様は「すべてが終わった」と叫ばれて息を引き取られました。イエス様がこの地上でなすべき働きはすべて終わったとの宣言です。贖いの業はすべて終わったのです。しかし、この叫びにはさらに深い意味がありました。イエス様はご自分の働きが終わったと、独り言を言ったわけではないのです。私たち一人一人に対してはもちろんのこと、天使たちや他世界の住民たちに対して、「すべてが終わった」と叫ばれたのです。天国で発生した罪は、やがて地上に移り、すべての人々を飲み込んでいきました。これは他世界の住人(地球以外の被造物)をも巻き込んだ、全宇宙規模の出来事だったのでした。それゆえ全宇宙に対して、「すべては終わった」と宣言する必要があつたのです。私たちとともに、全宇宙の被造物が、キリストの勝利をわかち合うのです。「すべてが終わった」との宣言により、長い間継続されてきた大争闘はここに決定し、悪の最後の根絶が確実となった」(嵐に備えて P19)のでした。悪魔にとってこの宣言は、最も耳にしたくない言葉だったのでした。「天は救い主の勝利に凱歌をあげ、サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った」(各時代の

希望下 P282) のです。

【水・主は私たちのために死なれた】

愛する主が十字架で死なれると言うことは、弟子たちにとって本当に大きな悲しみだったことでしょう。しかし、イエス様は私たちのために死なれたのだということがわかったとき、悲しみは喜びにかわっていきました。弟子のヨハネはイエス様の十字架について、こう語りました。

ヨハネ 3 章 16 節「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

聖書のみ言葉の中でも最も有名なみ言葉の一つです。神様がどれほど私たちを愛しておられるのか。それは御子を私たちを救うためにお与えくださったほどだと言うわけです。十字架は、神の愛そのものなのです。神様は私たちが一人も滅びてほしくないと願っておられます。「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」に、イエス様は自ら十字架の道を歩まれ、また父なる神様は、御子が私たちの身代わりとなって死ぬことをお許しになったのです。イエス様の命という代価で救いえないものはありません。このこと疑わず、主の愛に感謝し、救われたことを喜んで生きることこそ、主が望まれていることなのです。

【木・十字架の意味】

コリントー 1 章 18 節

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」

十字架は人を二つに分けます。滅んでいくものと救われるものとの二つに、いやおうなしに分けるのです。滅んでいく者にとって十字架は、愚かなものに見えます。彼らにとって十字架は何の力もなく、十字架の救いの力を信じ、それにすがっている人は、何と愚かなことかと思うのです。ところが、救われる者たちにとって十字架は、まさに神の力そのものなのです。十字架の意味を悟るのに、難しい知識や学問は必要ありません。むしろ、この世の知識がかえって十字架の悟りを妨げます。

コリントー 1 章 19 節に、「それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする」と書いてあります。もしそれが十字架の悟りを妨げるなら、この世の知識も賢さも何の意味もありません。イエス様はご自分が世に来た理由を、次のように言っています。

「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来た」ヨハネ 12:47

「わたしがこの世に来たのは、裁くためである…」ヨハネ 9 章 39 節

正反対のことを言っています。裁くと言う言葉は、「分ける」と言う意味があります。救われるものと滅びるものとに分けるのです。十字架はまさにその別れ道になるのです。